

文部科学省平成 24 年度「博士課程教育リーディングプログラム」採択事業

災害看護グローバルリーダー養成プログラム

千葉大学大学院看護学研究科

共同災害看護学専攻 キックオフ・セミナー

日時：平成 26 年 2 月 23 日（日）

場所：三井ガーデンホテル千葉

主催：千葉大学大学院看護学研究科

主 催 者 挨 拶

千葉大学大学院看護学研究科長

宮崎 美砂子

いよいよ、平成 26 年 4 月から、千葉大学大学院看護学研究科に、既設の看護学専攻、看護システム管理学専攻に続く、3つめの新しい専攻として、共同災害看護学専攻（5 年一貫制博士課程）がスタートします。

共同災害看護学専攻は、千葉大学、高知県立大学、兵庫県立大学、東京医科歯科大学、日本赤十字看護大学の 5 大学が共同して運営する、新しい形態の大学院です。5 大学の教育・研究の資源を共有し、共同することにより、災害看護学分野において、学際的かつ国際的に指導力を発揮し、安全・安心な社会づくり、人間の安全保障の推進に寄与することのできる「災害看護グローバルリーダー」を養成することを目標とするものです。共同災害看護学専攻は、文部科学省による博士課程教育リーディングプログラムに採択され、これからの社会が必要とする、新しい人材養成の教育課程として、国内外から注目されております。

共同災害看護学専攻の拠点の 1 つである千葉大学が、共同災害看護学専攻において、とくに重視する人材養成は、災害対応という、複雑かつ中長期に及ぶ未知の課題に対して、果敢に臨み、様々な領域の人々と連携協働しながら問題の構造と対応策に対して探究を重ね、地域再生に向けて現地に新たな価値を創造できる人材の育成です。学問的な見地からの分析力を養うとともに、現場に入り、現実の問題状況に向かい合いながら、グローバルリーダーとして求められる探究力、指導力、社会変革力等を実地に養っていけるようにしたいと考えております。

このように、共同災害看護学専攻では、災害看護グローバルリーダーという、これまでにない、新しい人材養成に取り組んでいきますので、人材養成の基盤となる災害看護学の構築ならびに教育・研究の環境づくりが極めて重要であると考えています。

今回のキックオフ・セミナーは、人材養成の基盤となる、災害看護学の構築及び教育・研究の環境づくりに向けて、災害に関連する様々な分野の皆さまと意見交換し、連携・協働の契機とすることをねらいとして企画しました。

記念講演では、ハーバード大学において人道支援イニシアチブメンバーとしてご活躍中の慶應義塾大学病院救急科医師の有井麻矢氏から「日本と世界における災害公衆衛生について」と題して、災害時のリーダー及びシステムのあり方についてお話を頂きます。パネルディスカッションでは、「災害看護学の構築に向けて」をテーマに、分野の異なる 4 名のパネリストとして、航空自衛隊航空医学実験隊司令の山田憲彦氏、千葉大学環境リモートセンシング研究センター教授の近藤昭彦氏、北里大学看護学部准教授の石井美恵子氏にご出演頂き、学際的な観点から話題提供を頂き、討議を通して、災害看護学の構築に向けて大事となることへの理解を深めたいと思います。プログラムの最後には、個別進学相談の場を設けますので、ぜひご参加ください。

今回のセミナーを通して、安全・安心な社会づくり、人間の安全保障の推進に対して、様々な分野の皆さまとの連携・協働が活発化し、災害看護分野の人材養成が確実に進んでいくことを期待したいと思います。

当日プログラム

10:00 ご挨拶 宮崎 美砂子 (千葉大学大学院看護学研究科長)
徳久 剛 史 (千葉大学理事)
石橋みゆき氏 (文部科学省高等教育局医学教育課看護教育専門官)

10:15~10:40

カリキュラム概要説明 宮崎 美砂子 (千葉大学大学院看護学研究科長)

10:40~11:40

記念講演

「日本と世界における災害公衆衛生について」

講師 有井 麻矢 氏

(慶應義塾大学病院救急科 医師、ハーバード大学人道支援イニシアチブ 教員)

座長 岩崎 弥生 (千葉大学大学院看護学研究科)

11:40~13:00 昼休憩

13:00~16:00

パネル・ディスカッション

「災害看護学の構築に向けて」

パネリスト 学際的な科学としての災害対応—やり甲斐とやりにくさの共存

山田 憲彦 氏 (航空自衛隊航空医学実験隊司令)

パネリスト 人と自然の関係学としての地理学の貢献

近藤 昭彦 氏

(千葉大学環境リモートセンシング研究センター 教授)

パネリスト いのちと生活を守る災害看護のはたらき

石井 美恵子 氏 (北里大学看護学部 准教授)

指定発言者 柳沢 香枝 氏 (独立行政法人国際協力機構東・中央アジア部長)

座長 正木 治恵 (千葉大学大学院看護学研究科)

和住 淑子 (千葉大学大学院看護学研究科)

(15分休憩)

16:15~17:00 個別進学相談会

共同災害看護学専攻 カリキュラム概要説明

宮崎 美砂子

(千葉大学大学院看護学研究科長)



共同災害看護学専攻

博士課程教育リーディングプログラム 災害看護グローバルリーダー 養成プログラム

カリキュラム概要説明



今なぜ、グローバルリーダーが必要か

東日本大震災からの教訓を検証し、世界の問題を俯瞰的に検討する

<これまでの実績>

- 目の前の傷病・健康課題への対応
- ✓ 救護中心・急性期的な視点
 - ✓ 災害サイクル別の縦割り支援
 - ✓ 個々への支援
 - ✓ 組織内の枠の中での調整
 - ✓ DMAT・支援ナースの訓練
 - ✓ 過去の災害の経験による教訓



看護のパラダイム転換

<これからの課題>

組織を超えた長期的な社会的問題解決

- 復興・長期的な視点
- 社会参加型の減災の検討
- シームレスな一貫した支援
- 個人・家族・地域の問題を継続的に解決
- 政策提言のためのエビデンスづくり
- 組織を超えた仕組みを変える統括能力
- 災害倫理課題の探究
- 実験的、先駆的活動の検証

組織・領域を超えて問題解決する場と、その中で俯瞰的に発言できるリーダーが必要

看護＝人々の命と生活を守る安全・安心に向けた複合領域

教育理念

人間の安全保障を共通理念とし、共同する5大学がそれぞれ蓄積してきた資源を共有し、日本や世界で求められている災害看護に関する多くの課題に的確に対応・解決し、**学際的・国際的指導力を発揮し、人々の健康社会構築と安全・安心・自立に寄与する世界的リーダーを養成**する

教育目的・目標

目的

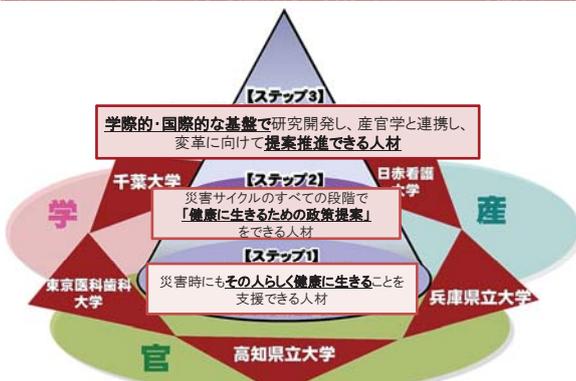
- 他の近接学問と相互に関連・連携しつつ、学術の理論および応用について産官学を視野に入れた教育研究を行い、特に災害看護学に関してその深奥を極め、**人間の安全保障の進展に寄与すること**

目標

- 日本ならびに世界で求められている災害看護に関する多くの課題に的確に対応し、解決できる高度な実践能力かつ研究能力を兼ね備え、**国際的・学際的指導力を発揮するグローバルリーダーを養成すること**

養成する人材像

人々の命と生活を守る看護力を基盤に、先見性、独自性を持って災害サイクルにおける「人間の安全保障」の実現に、グローバルに貢献する人材



学位の名称

博士(看護学)(学位記にはDisaster Nursing Global Leaderを付記する)

PhD(Nursing)(学位記にはDisaster Nursing Global Leaderを付記する)

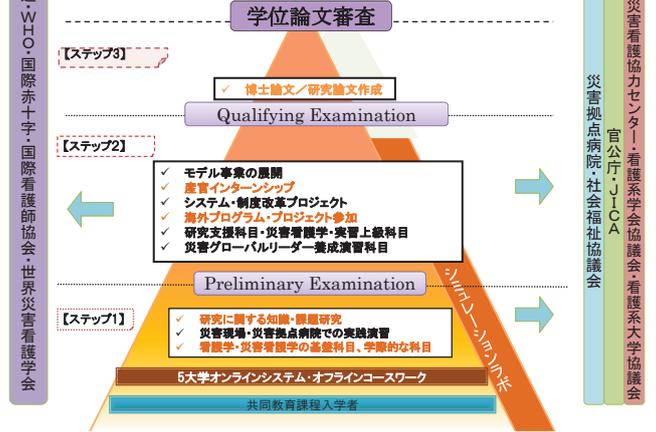
教育課程の特色

5大学がそれぞれの強みを生かしつつ、災害看護グローバルリーダー育成に向けた教育を共同して行う

<教育方法の工夫>

- 段階的・体系的なカリキュラムの設置
- 個々の学生の背景・将来展望を踏まえた履修指導
- TV会議システムを用いた「学生参画型」の遠隔授業方法の導入
- 自主学習・学習管理のためのLMS(Learning Management System)の導入
- シミュレーション教育の効果的活用
- 国内外のフィールドワークによる実践力の育成
- 産官学協働のインターンシップによる実践力・研究力の育成
- 5大学教員の共同による研究指導体制の構築

共同大学院教育課程



博士学位取得のステップ

ステップ1:
Preliminary Examination
(第一次進級判定)

ステップ2:
Qualifying Examination
(第二次進級判定)

ステップ3:
学位論文審査および最終試験
(学位授与の判定)

<課程の修了要件>

- 合計50単位以上の履修(40単位は必修であり、10単位は選択科目または選択必修科目から修得)
- 博士論文の審査および最終試験の合格

教育内容(6科目群により構成)

科目群	科目名	単位数		開講年次
		必修	選択	
看護学の学問基盤に関する科目群(12科目)	看護研究方法	6単位	12単位	1~3年次
	理論看護学			
	看護倫理			
	看護情報統計学			
災害グローバルリーダーに必要な学際的な科目群(13科目)	看護情報統計学	20単位		1~3年次
	保健学的・疫学的研究方法 など			
	環境防災学			
	グローバルヘルスと政策			
災害看護学に関する科目群(9科目)	災害看護学	11単位	3単位	1~4年次
	災害看護学特論			
	災害看護グローバルコーディネーション論			
	災害国際活動論			
災害看護学演習(9科目)	災害看護学実習	4単位	9単位	1~2年次
	災害看護学演習Ⅰ(国内実習)			
	災害看護学演習Ⅱ(海外実習)			
	インディペンデントスタディ			
災害看護学実習(7科目)	災害看護学実習Ⅰ(国内実習)	4単位	5単位	2~4年次
	災害看護学実習Ⅱ(海外実習)			
	インディペンデントスタディ			
	実践課題レポート			
災害看護学に関する研究支援科目群(3科目)	災害看護学演習Ⅱ(海外実習)	15単位		2~5年次
	実践課題レポート			
単位合計		50単位		

教育内容(6科目群により構成)

看護学の学問基盤に関する科目群(12科目)	災害と人々の健康に関するさまざまな看護現象を把握し、問題や課題解決につなげていくために必要となる理論や倫理、研究方法についての科目			
災害グローバルリーダーに必要な学際的な科目群(13科目)	看護情報統計学 保健学的・疫学的研究方法 など			
災害看護学に関する科目群(9科目)	看護学特論 災害看護学 災害看護グローバルコーディネーション論 災害国際活動論			
災害看護学演習(9科目)	災害看護学実習 災害看護学演習Ⅰ(国内実習) 災害看護学演習Ⅱ(海外実習) インディペンデントスタディ	4単位	5単位	2~4年次
災害看護学実習(7科目)	実践課題レポート			
災害看護学に関する研究支援科目群(3科目)	災害看護学演習Ⅱ(海外実習) 博士論文	15単位		2~5年次

看護研究方法・理論
看護学・看護倫理・
看護情報統計学、など

教育内容(6科目群により構成)

看護学の学問基盤に関する科目群(12科目)	看護研究方法 理論看護学 看護倫理 看護情報統計学	6単位	12単位	1~3年次
災害グローバルリーダーに必要な学際的な科目群(13科目)	保健学的・疫学的研究方法 など			
災害看護学に関する科目群(9科目)	災害と人々の生活・文化、社会システム等の多様性を理解し、危機管理、防災、政策等の問題を学際的に検討していくための科目			
災害看護学に関する科目群(9科目)	災害国際活動論			
災害看護学演習(9科目)	災害看護学実習 災害看護学演習Ⅰ(国内実習) 災害看護学演習Ⅱ(海外実習) インディペンデントスタディ			
災害看護学実習(7科目)	実践課題レポート			
災害看護学に関する研究支援科目群(3科目)	災害看護学演習Ⅱ(海外実習) 博士論文	15単位		2~5年次

危機管理論・環境防災学・
災害心理学・災害と文化・
グローバルヘルスと政策・
Professional writing, など

教育内容(6科目群により構成)

看護学の学問基盤に関する科目群(12科目)	看護研究方法 理論看護学 看護倫理 看護情報統計学 疫学的・疫学的研究方法 など	6単位	12単位	1~3年次
災害グローバルリーダーに必要な学際的な科目群(13科目)	危機管理論 環境防災学 グローバルヘルスと政策 災害医療学 災害心理学 Professional writing など		20単位	1~3年次
災害看護学に関する科目群(9科目)	災害看護活動に必要な知識と実践能力、および災害に特化した理論構築と倫理を修得していくための科目			
災害看護学演習(9科目)	災害看護活動論演習 災害時専門職連携演習			
災害看護学実習(7科目)	災害看護学特論・災害看護活動論・グローバルコーディネーション論・災害国際活動論, など			
災害看護学に関する研究支援科目群(3科目)	博士論文			

教育内容(6科目群により構成)

看護学の学問基盤に関する科目群(12科目)	看護研究方法 理論看護学 看護倫理 看護情報統計学 疫学的・疫学的研究方法 など	6単位	12単位	1~3年次
災害グローバルリーダーに必要な学際的な科目群(13科目)	危機管理論 環境防災学 グローバルヘルスと政策 災害医療学 災害心理学 Professional writing など		20単位	1~3年次
災害看護学に関する科目群(9科目)	災害看護活動に必要な知識と実践能力、および災害に特化した理論構築と倫理を修得していくための科目			
災害看護学演習(9科目)	災害看護活動論演習 災害時専門職連携演習			
災害看護学実習(7科目)	災害看護学特論・災害看護活動論・グローバルコーディネーション論・災害国際活動論, など			
災害看護学に関する研究支援科目群(3科目)	博士論文			

災害看護活動論演習・
災害時専門職連携演習
国内外の災害の分析

さまざまな災害状況における状況判断や
意思決定能力をシミュレーション教育に
よって修得するとともに、災害時に必要な
看護実践能力を修得するための科目

教育内容(6科目群により構成)

看護学の学問基盤に関する科目群(12科目)	看護研究方法 理論看護学 看護倫理 看護情報統計学 疫学的・疫学的研究方法 など	6単位	12単位	1~3年次
災害グローバルリーダーに必要な学際的な科目群(13科目)	危機管理論 環境防災学 グローバルヘルスと政策 災害医療学 災害心理学 Professional writing など		20単位	1~3年次
災害看護学に関する科目群(9科目)	国内外のフィールドワーク 産官学協働のインターンシップ			
災害看護学演習(9科目)	災害看護活動論演習 災害時専門職連携演習			
災害看護学実習(7科目)	国内外の保健医療機関、行政、災害関連の研究機関や団体等におけるインターンシップや被災地における実習等の活動を通して実践能力を育成していく科目			
災害看護学に関する研究支援科目群(3科目)	博士論文			

教育内容(6科目群により構成)

看護学の学問基盤に関する科目群(12科目)	看護研究方法 理論看護学 看護倫理 看護情報統計学 疫学的・疫学的研究方法 など	6単位	12単位	1~3年次
災害グローバルリーダーに必要な学際的な科目群(13科目)	危機管理論 環境防災学 グローバルヘルスと政策 災害医療学 災害心理学 Professional writing など		20単位	1~3年次
災害看護学に関する科目群(9科目)	課題レポート 災害看護研究デベロップメント 博士論文指導			
災害看護学演習(9科目)	災害看護活動論演習 災害時専門職連携演習			
災害看護学実習(7科目)	災害看護活動をエビデンスに基づき実践するとともに、その活動の成果を研究として積み重ね、論文としてまとめていく能力を育成するための科目			
災害看護学に関する研究支援科目群(3科目)	博士論文			

課題レポート
災害看護研究デベロップメント
博士論文指導

災害看護活動をエビデンスに基づき実践
するとともに、その活動の成果を研究として
積み重ね、論文としてまとめていく能力
を育成するための科目

教育内容(6科目群により構成)

看護学の学問基盤に関する科目群(12科目)	看護研究方法 理論看護学 看護倫理 看護情報統計学 疫学的・疫学的研究方法 など	6単位	12単位	1~3年次
災害グローバルリーダーに必要な学際的な科目群(13科目)	危機管理論 環境防災学 グローバルヘルスと政策 災害医療学 災害心理学 Professional writing など		20単位	1~3年次
災害看護学に関する科目群(9科目)	国内外のフィールドワーク 産官学協働のインターンシップ			
災害看護学演習(9科目)	災害看護活動論演習 災害時専門職連携演習			
災害看護学実習(7科目)	国内外の保健医療機関、行政、災害関連の研究機関や団体等におけるインターンシップや被災地における実習等の活動を通して実践能力を育成していく科目			
災害看護学に関する研究支援科目群(3科目)	博士論文			

教育内容(6科目群により構成)

看護学の学問基盤に関する科目群(12科目)	看護研究方法 理論看護学 看護倫理 看護情報統計学 疫学的・疫学的研究方法 など	6単位	12単位	1~3年次
災害グローバルリーダーに必要な学際的な科目群(13科目)	危機管理論 環境防災学 グローバルヘルスと政策 災害医療学 災害心理学 Professional writing など		20単位	1~3年次
災害看護学に関する科目群(9科目)	課題レポート 災害看護研究デベロップメント 博士論文指導			
災害看護学演習(9科目)	災害看護活動論演習 災害時専門職連携演習			
災害看護学実習(7科目)	災害看護活動をエビデンスに基づき実践するとともに、その活動の成果を研究として積み重ね、論文としてまとめていく能力を育成するための科目			
災害看護学に関する研究支援科目群(3科目)	博士論文			

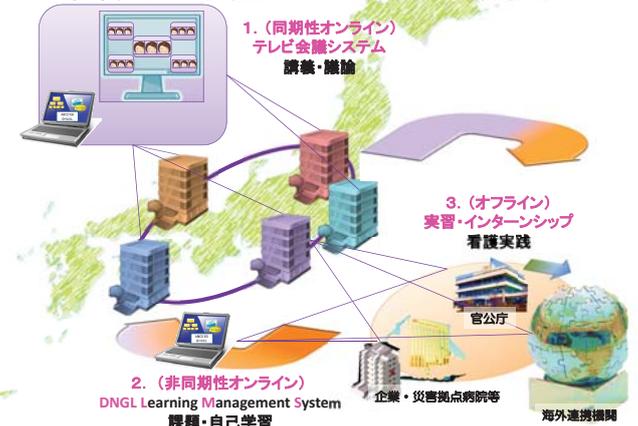
課題レポート
災害看護研究デベロップメント
博士論文指導

災害看護活動をエビデンスに基づき実践
するとともに、その活動の成果を研究として
積み重ね、論文としてまとめていく能力
を育成するための科目

科目群	単位数	年次
看護学の学問基盤に関する科目群(12科目)	6	1~3年次
災害グローバルリーダーに必要な学際的な科目群(13科目)	20	1~3年次
災害看護学に関する科目群(9科目)	9	1~3年次
災害看護学演習(9科目)	9	1~3年次
災害看護学実習(7科目)	7	1~3年次
災害看護学に関する研究支援科目群(3科目)	3	2~5年次
単位合計	50	

- 1~2年次は、基盤となる知識や方法論を学習すると共に、研究的や視野で実践課題を作成する
- 3~5年次は、現状の打破や解決につながる研究課題を設定し、多様な方法論で接近することを学ぶ。主指導教員のほかに、5大学の教員及び学外の専門家からも指導を受ける

最新のTV会議システムによる集合教育



DNGL遠隔授業の開発

- 1 テレビ会議システムを用いた集合教育
- 2 ネットワークとデータベースによるビデオオンデマンド教育
- 3 仮想教室におけるフォーラム(ディスカッションボード)
- 4 テレビ会議システムによるネットワークを介した個別授業
- 5 ネットワークを介した課題達成
- 6 ネットワークを介した学生の相互協力による課題達成
- 7 ネットワークを介したシミュレーション/ビジネスゲーム



龍谷大学 鈴木先生との
テレビ会議システムによるディスカッション
DNGL遠隔授業開発プロジェクト

フィールドワーク通した実践力の育成

災害看護学実習Ⅰ(国内)

災害に対する備えの時期に焦点をあて、国内の医療機関、地域、教育機関、産業現場等のいずれかの場を選択し、防災・減災のための教育/訓練プログラムの作成から運営、評価までの一連の過程を行う。この実習を通して、人々と地域、あるいは組織における災害への備えを促進し、連携・調整・指揮等のあり方を身につけ、リーダーとしての資質を高める。



災害看護学実習Ⅱ(海外)

災害時あるいは備えにおける国際機関の活動について、現地の災害マネジメント責任者のもとでその実際を学び、当該国の文化や規範を尊重しつつ、減災対策や人的資源開発の実施支援、そこにおける多職種多機関協働や調整およびPDCAサイクルを踏まえた活動評価と報告文書作成など、グローバルリーダーとしての能力を開発する。
(バングラデシュ赤新月社、地元メディカルセンター、WHO)



産官学連携モデルでの有機的な教育研究活動推進

減災連携モデルの中で、学生がNeeds&Seedsを汲み、インターンシップや研究(トランスレーショナルリサーチ)を行う。

- 減災をテーマとした産官学課題の共有
- 教育と被災社会のWin-Win連携
- 現社会の「これが必要!」を実現



国際力を培う教育の推進

5大学が持つ幅広いネットワークや経験
本専攻のための新たなグローバルネットワークの開拓

グローバルヘルスの問題分析能力
多文化共生コミュニケーション、異文化間の交渉能力
グローバルスタンダードを構築、国際機関を活用し、普及・実現する能力

科目例

- グローバルヘルス
- 国際法(国際人道法、国際災害対応法、難民条約ほか)
- 人間の安全保障、異文化アセスメント、多文化における危機管理
- 国際政治、宗教と生活慣習
- 語学力(交渉等に必要な会話力、文書作成能力)

方法例

- English-based Educationでのグローバル・リテラシー
- 多文化、多職種、多領域の議論の中での論理思考
- 国内外フィールド演習での多文化共生・異文化適応
- キャリアパスに応じたハイレベルな現場での実践経験

世界の現場・リーダーから
学ぶ中で、国際力を培う

13/20

世界に広がる修了者のキャリアパス



本プログラムの発展性および波及効果

災害看護グローバルリーダー養成プログラムの確立

教育 成果

- 多面的・組織的な視点から災害現象を捉え、学際的、国際的な枠組みで解決
- ローカル/グローバル課題に災害看護の専門性を活かして、リーダーシップを発揮する人材の継続的育成

発展性

- 災害サイクルを基盤とし、シームレスな看護実践学の構築・参画型の減災
- 学際的方法論の拡大による、新たな研究課題の探求、学問の発展
- 看護のパラダイム転換(グローバル化、学際・複合領域的、学問体系再編)
- 学際的協働モデルによる、人間の安全保障システムの提供

波及 効果

- 国公立共同教育・連合教育の発展
- 国公立の枠組みを超えた大学院群の形成
- 大学院教育改革の世界モデルの提案
- 地球上の安全・安心社会づくりに貢献、人間の安全保障の推進

20/20

記念講演

日本と世界における災害公衆衛生について

講師 有井 麻矢 氏

(慶應義塾大学病院救急科 医師、ハーバード大学人道支援イニシアチブ 教員)

座長 岩崎 弥生 (千葉大学大学院看護学研究科)

日本と世界における災害公衆衛生について

有井 麻矢

(慶應義塾大学病院救急科 医師、ハーバード大学人道支援イニシアチブ 教員)

円錐が中に入った立方体の上面と側面に小さな穴を開けて、中をのぞいたとする。横からのぞいた人は、三角形を目にし、上からのぞいた人は円を目にする。ニューヨークを襲った9.11の時、世界貿易ビルの麓に指令センターを立ち上げたニューヨーク市消防局は、燃える建物を見て、中にいる人々を助けようと消防士を建物に送った。時を同じくして、ニューヨーク市警察は飛行機が激突した上空にヘリコプターを飛ばしていた。その高さからは、真っ赤になって溶けつつある建物の桁が見え、建物が間もなく崩壊することは明らかであった。その情報をもとに、ニューヨーク市警本部は建物内の全警察官に避難命令を出した。しかし、警察と消防局は異なる無線周波数を用いており、互いに直接無線で緊急連絡する意志もなければ、それを可能にするシステムもなかった。警察から見た、「円」と、消防から見た「三角」。その2つの情報が共有され、統合されることはなかった。結果としてこの日、23人のニューヨーク市警察官と320人以上のニューヨーク市消防士が命を落とした。

災害現場には、警察や消防、救急隊、場合によっては軍など様々な組織が集まるが、それぞれに専門や特徴があり、災害に対する視点も異なる。多組織が活動をスムーズに調整し、共同で災害支援を行うためには、互いの視点を理解し合い、情報共有を行うことが不可欠である。また、災害現場を指揮するリーダーは、「三角」と「円」という二つの情報を分析し、それを正しく円錐として捉えることができなければならない。この重大な教訓は、ハーバード大学公衆衛生大学院と同大学のケネディ行政大学院が共同で運営する危機リーダーシップ・プログラムで、「立方体の中の円錐」と呼ばれている。

3年前に我が国で起きた東日本大震災を「人道危機」として捉え、被災者のニーズを把握したうえで、多セクターをコーディネートするリーダーは存在しなかった。人道危機というレンズからみると、大人数の避難者が発生する大規模災害における水、衛生、食糧、避難所環境、医療、セキュリティーの迅速ニーズ調査とそれに基づいた支援はごく当然である。しかし、ほとんどの支援者が「地震と津波」あるいは「原発事故」という「三角」をみていた中で、これらを総合的に「人道危機」という「円錐」として捉えることができたリーダーはいなかった。今後は、このような大規模災害において、医療、公衆衛生、消防、警察、自衛隊等を統率する協調システムを構築することが急務である。また、地域社会を巻き込んだ災害訓練を定期的の実施し、不足している部分を事前に明確にすると同時に、災害において最も影響を受けやすい、高齢者や子供、妊婦、身体障害者、知的障害者、精神疾患を患う人など、災害弱者を守ることのできる支援システムを地域全体で築き上げることが求められている。

パネル・ディスカッション

災害看護学の構築に向けて

学際的な科学としての災害対応－やり甲斐とやりにくさの共存

山田 憲彦 氏（航空自衛隊航空医学実験隊司令）

人と自然の関係学としての地理学の貢献

近藤 昭彦 氏

（千葉大学環境リモートセンシング研究センター 教授）

いのちと生活を守る災害看護のはたらき

石井 美恵子 氏（北里大学看護学部 准教授）

座長 正木 治恵（千葉大学大学院看護学研究科）

和住 淑子（千葉大学大学院看護学研究科）

パネル・ディスカッション

「災害看護学の構築に向けて」

座長 正木 治恵（千葉大学大学院看護学研究科）

和住 淑子（千葉大学大学院看護学研究科）

東日本大震災からまもなく3年が経過しようとしています。この未曾有の大災害からの復興過程において、看護の専門的な役割発揮の必要性はますます大きくなっているといえるでしょう。千葉大学は、平成24年に、高知県立大学、兵庫県立大学、東京医科歯科大学、日本赤十字看護大学と共同で、我が国初の国公私立5大学共同教育課程「災害看護グローバルリーダー養成プログラム」を立ち上げ、平成26年4月より、いよいよ「災害看護グローバルリーダー」の養成を開始します。

本パネル・ディスカッションは、日本のみならず世界で生じている災害に関する多くの課題に的確に対応し、学際的・国際的指導力を発揮し、人々の健康社会構築と安全・安心・自立に寄与する「災害看護グローバルリーダー」養成の基盤となる「災害看護学」の構築に向けて確かな一歩を踏み出すことを目的に、グローバルな視野で災害支援にかかわってこられた方々をパネリストとしてお招きしております。

山田憲彦氏からは、自衛隊という組織において災害支援にかかわってこられたお立場から、そのやり甲斐とやりにくさについてお話しいたします。

近藤昭彦氏からは、地理学を専門とされるお立場から、人と自然の関係学としての地理学の位置づけ、および災害支援における地理学の貢献についてお話しいたします。

石井美恵子氏からは、看護師の立場でこれまで多くの国内外の災害支援活動に携わってこられたお立場から、災害支援における看護の独自性・専門性についてお話しいたします。

後半は、パネリストの方々のお話を踏まえ、独立行政法人国際協力機構東・中央アジア部長の柳沢香枝氏にご発言をいただきながら、会場の皆様とともに、人々の生活に根差した災害支援を多くの関係者と協働しながら創り上げ、実現できる災害看護グローバルリーダー養成の基盤となる「災害看護学」構築の方向性を探っていきたいと考えております。お集まりの皆様との活発なディスカッションを期待しております。

学際的な科学としての災害対応—やり甲斐とやりにくさの共存

山田 憲彦

(航空自衛隊航空医学実験隊司令)

災害には、完全にユニバーサルな定義は存在しませんが、その中で概ね共有されている概念は、「何らかの事象（地震などの自然現象～大規模な事故等）によって、莫大な需要（医療の場合、患者さんと考えれば分かりやすい。）が発生し、その需要に対し当該地域（市町村～県～国等多様）独力では対応が困難な状況」と総括できると思います。この「独力で対応が困難な状況」への対応が求められる所に、災害対応の困難さとユニークさの原点があると考えられます。

「独力で対応が困難な状況」に対応する訳ですから、プレイヤー（関係する人や機関等の総称）が多種多様であり多数存在することが、災害対応を考える上での前提となります。この多種多様なプレイヤーを効果的に活用する仕組み作りが、災害対応の成否にとって決定的に重要です。（ポイントとして、①プレイヤー間の情報（共有）管理と、②リソースの調整の二点が、一般的には指摘されている。）以上より、災害対応には、学際性が前提的に求められることがご理解頂けるものと思います。

科学は、客観性があるが故に、他者の経験や知見を普遍化して活用していく上で、極めて有効な方法論を提供してくれます。災害対応のような多種多様なプレイヤーの協力が求められる活動においては、災害に関する共通認識を与えてくれる科学的アプローチは、特に効果が大きいと考えられます。しかし一方で、特に規模が大きい災害においては、その発生が非常にマレであるために、そこで得られた知見等について、科学の重要な要件である「再現性」を満足することが大変困難である現実もあります。「災害学理の確立」そのものが課題とされる由縁です。災害（対応）に関する学問においては、科学的なアプローチには一定の限界が有ることを十分に承知した上で科学的所見を適確に活用するとともに、しっかりとした展望をもって論理を構築し、将来の災害に着実に備える叡智が求められます。

災害との闘いは、特殊なイベントという印象をお持ちかもしれませんが、その本旨は、「状況や環境による支配からの脱却」という、まさに人間を主体的で特別な存在としてきた根本原理に深く根付いたものであります。将来の災害の被害を低減させるという目標の人類史的な意義を共有しながら、災害看護学の皆様とともに進んでいくことを心より希望します。

最後になりますが、貴学がグローバルリーダーの養成を教育目的とされていることに、深甚より敬意を表します。リーダーシップこそ、多様なプレイヤーをまとめつつ、困難ではあるが、やり甲斐のある災害対応を進める上でキイとなるからです。

「リーダーシップとは、ヒトを共通の目的に団結させる能力と意志であり、ヒトに信頼の念を起こさせる人格の力である。」（英国モンゴメリー大将語録より）

人と自然の関係学としての地理学の貢献

近藤 昭彦

(千葉大学環境リモートセンシング研究センター)

DNGLに参加することになり、初めて「災害看護」という分野があることを知った。それまでは事故や災害の発生時に対応する「救急看護」のイメージしかなかったが、長期間にわたる災害サイクルの中における看護のあり方を考える分野の存在を知り、自分の専門である「地理学」との関連性を考えることができるようになった。

地理学は人と自然の関係学であり、環境学そのものであるともいえる。地理学の柱である系統地理学はその中に、自然地理学と人文地理学を含み、環境、すなわち我々を取り巻いて相互作用する範囲における諸事象の自然的側面と人間的側面の両方を扱う。災害（ディザスター）は素因のあるところに誘因（ハザード）が作用することにより発生するが、素因には自然と人間の両側面が存在する。例えば、川は本来その河道を変遷させながら平野を形成するが、近代化により堤防が構築されると人は川のすぐ脇まで暮らしの領域を広げた。川は時折本来の性質を取り戻すことがあるが、そこに人が居ることで災害になる。気候変動による超過降雨や大地震の発生が確実に想定される状況で我々はどうすれば良いだろうか。

まず自然の仕組みを知り、人と自然の分断を修復することが大切である。川のそばで暮らす人が川のことを知ること、斜面のそばで暮らす人が地形変化について知ることが減災につながる。近代社会は人と自然の分断による災いを科学技術の力で防いできたといっても過言ではない。

都市化の進展とともに予想される災害の規模が大きくなっている。例えば、利根川の計画高水流量は明治33年の3,750m³/s（八斗島における基準流量）であったが、その後の堤防やダム建設にも関わらず、現在は八ッ場ダムの建設を前提とした値が16,000m³/sとなり、当初の4倍以上になっている。我々の暮らしを守るためのコストは膨らむばかりである。このコストを負担し続けることは可能だろうか。

昨今の災害では“想定外”という言葉をよく聞くようになった。想定外とは、想定していないが、技術的な対応、行政による対応が可能である場合と、現実的な対応が不可能な場合がある。前者の場合は的確なシステムを構築することが当面の課題であるが、後者の場合はどうすれば良いのだろうか。答えは一つではないが、アカデミックセクターにいる我々は、人と自然の良好な関係性を保つ方法について考える材料を提供し、一緒に考えていく必要がある。

今後の防災・減災については様々な考え方があるが、その違いの根底にあるのは“生き方”であろう。安全とは何を守るための安全か、また安心とは何か。参画と協働を旨とし、トランスディシプリナリティーの立場から、価値、哲学や倫理までも包摂した議論に基づき、人の諒解を形成していく必要がある。ここに長期的な観点における災害看護の役割があると感じている。

いのちと生活を守る災害看護のはたらき

石井 美恵子
(北里大学看護学部)

1995年米国での災害対策に関する研修を受講したのが災害医療との出会いであった。その後、医療従事者向けのトリアージ訓練や災害時の初期対応訓練などの教育指導に携わったが、実際の経験をもたないことでの説得力の無さを感じ2003年 JICA 国際援助隊医療チーム（以下、JDR）の登録者となった。登録直後に発生した2003年イランバム地震が初めて派遣であった。派遣時は、救急看護認定看護師でもあり、またイランに在住した経験ももつことから被災者のいのちと生活を守るために看護師としての能力を存分に発揮したいという思いを持って現地に赴いた。しかし、実際の活動は、いわゆる外来診察の補助、資機材の管理などが中心で、看護師としての専門的な役割機能とは何かという疑問を持ち帰る結果となった。その疑問を解決すべく研究に取り組み、見出されたものは被災者のために役立ちたいという思いで関心と気遣いを寄せ、手を差し伸べる看護師たちのありようであった。

しかし、その結果からは、看護活動による成果につながるような実践を見出すことはできなかった。そして、その後に派遣となった2004年スマトラ沖地震・津波災害、2007年インドネシアジャワ島中部地震の経験の中で、災害看護とは何かという問いを持ちながら経験の再構成を続けた。そして、制限の多い環境の中での制限された看護活動ではあるものの、被災者の健康回復や維持、被災地域の医療保健に関する対応能力向上へ向けた支援に最善を尽すこと、特にヘルスプロモーション領域への介入が重要であるという見解に達した。そして、派遣前の教育が重要であるとの認識から JDR での看護職向けの研修内容を大幅に改定し現在に至っている。

平時にできないことは、災害時にもできない。これまでの災害支援活動を通しての一つの結論である。災害看護は、平時の医療機関で展開されるルーチンワークとは様相が異なり、ケースワークの連続である。環境破壊と文明が崩壊したフィールドで、混乱と不確かさの中で繰り返される意思決定の連続である。そこで重要なのは、考える力、論理的な思考能力である。平時に情緒的思考に傾倒している人が、災害時だけは論理的なるなどということは起こりえない。看護職である自分は何をするためにそこにいるのか、そのために何をしなくてはならないのかを、常に自分の頭で考えることが強く求められるのが災害という出来事である。そして、看護職としての効果的なはたらきを実現するためにも、または本分を見失わないためにも、考えるための拠り所や羅針盤としての看護哲学や看護理論というものが重要であると確信する。

手段や方法といったテクニカルなことに埋没しているように思われる看護というものの本質とその目的を看護職自身が確信して被災地に立つことによって、被災者のいのちと生活を守るはたらきが実現できるものと考えている。

アンケート結果（抜粋）

回答 42名

質問1 本日のキックオフ・セミナーを、どこからお知りになりましたか？

ホームページ	4
職場/自宅に案内が届いた	28
職場から勧められた	5
メール案内	5

質問2 本日のキックオフ・セミナーに参加された動機をお聞かせください。(複数回答可)

災害看護実践に関心がある	25
災害看護グローバルリーダーについて知りたかった	10
キックオフ・セミナーの内容に関心があった	22
災害看護学の構築に関心がある	13
共同災害看護学専攻に関心がある	8
その他	5

- ・ 防災計画、災害時看護計画の参考とするため
- ・ 災害看護を知るきっかけとしたかったため

質問3-1

公開講座・セミナーで取り上げてほしい内容、トピックスがありましたら教えて下さい。

- ・ 今回のような様々な学問領域との学際的な討論の場があると良い。
- ・ 現在の世界でのスタンダードな災害支援のあり方。海外での人道支援。
- ・ 行政、防災計画への看護学の貢献。
- ・ DMAT、JMAT、ACT 研究所の活動。
- ・ 情報管理(アプリなどの活用 etc)教育に関する事。
- ・ 放射能災害に対する知識、対応。
- ・ 水害(洪水等)による災害に関する内容。
- ・ 災害看護と看護管理。
- ・ 将来を考えるために、学部でも準備した方がよい事。
- ・ 「グローバル」という視点からの災害看護学。
- ・ メンタルヘルスケア（支援者側、専門職）について。

質問4 本日のキックオフ・セミナーについてのご意見ご感想を自由にお書きください。

- ・様々な側面から災害について学ぶことができ、非常に有意義だった。
- ・「わがこと化」については、どんなことに関しても大切であると思う。災害看護学のこれからの発展を楽しみにしつつ、私自身も学んでいきたい。
- ・どれも勉強になる内容だったが、災害発生急性期・亜急性期の話が主であった様に思えたため、もう少し中・長期の話を知りたい。また、どの話も支援、助ける(人命)といったことが主であるが、地域性や宗教観からの自立、死生観にも目を向けることがあると思う。そういった側面の理論的な話や経験を聞いてみたい。
- ・災害看護学に対する思いや期待、とらえ方は、置かれている立場によって様々だと感じた。現場で働いている保健師にとっても期待は大きく、とても勉強になった。
- ・記念講演、パネルディスカッションを含め、色々な気づきがあり、立場、見方によって、かなり違う事を改めて感じた。災害について、多くの立場の人と連携する事、平時からの長時的ビジョンに立っての考えが大切だと感じた。
- ・エモーショナルではなく、科学的な思考を心がけていきたいと感じた。
- ・3.11 や新型インフル対策で経験した事を次の計画に活用する際の参考となった。
- ・災害看護の足どり、問題、未来について考えを深めることができた。
- ・現在、学生として看護を学んでいる立場にあるが、今回の話はどれも新鮮であった。基礎教育においても災害看護が広く認知されていく必要があると感じた。
- ・今後の若い研究者や科学的根拠を考えて実践できるリーダーの育成を期待できる内容の研修であったと感じた。
- ・市町村の保健師として、リーダーが育成されていることは、今後、とても心強いと思う。災害はいつやってくるかわからないので、本日のセミナーから、学ぶことは多かった。いつかノウハウがある程度、専門知識として、身についた保健師が各市町村にいる世になれたらよいと思う。
- ・具体的に、どのような学びができるのか説明がきけてよかった。(共同大学院について)
- ・看護学の新たなスタートを知ることができた。今後の活動について期待している。